

新体詩 乙女の歌：新月の夕に立ちて：文苑

著者	藤輪
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 4
ページ	1 0 4 - 1 1 1
発行年	1901-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2298/5109

新体詩

乙女の歌

新月の夕に立ちて

藤 輪

夕日まばゆく消えゆきて、

薔薇に匂ふ西の空、

思はふかき夕星の、

色に神祕の歌曲あり。

霞にぼへる春の日の、

はこりの花の香に酔ひて、

花にねふれる白蝶の、

羽に神祕の美術あり。

戀をさゝやく谷川の、

はどりに生ひて水汲める、

小女がかみのかざしにと、
咲くもゆかしきすみれなの、
涙に神祕の情あり。

花を浮べて流れゆく、
四月の水に生ひ立ちて、
水上遠くさかのぼり、
清さを慕ふ鮎の魚の、
鱗に神祕の默示あり。

あはれ生命の樹の實生^みり、
慰籍の花の咲き匂ふ、

エデンの園はみえぬども、
自然の裡に聖愛が、
たれし恵は渥かなり。

身はすべもなき蟋蟀の、
苦しみうくる淺茅生の、
茂れる宿と人はいへど、
寒き涙の谷ならず、
快樂の滿つる世なりけり、

* * * * *

神の情は深くして、
諭は人にたえぬども、
好まぬ闇にいたりやすく、
人間遂に墮落して、
この世の春はうすらんか。

梢にかゝる夕霧の、

色にかざれる薄雲の、
二筋かゝる新月みれば、
そゝろに起る吾が思。

かの月影に笛きゝて、
女乙こゝろの一筋に、
あゝ燃えたちて燃えたちて、
戀のしらべをこゝろみぬ。

戀こそ人の幸なれど、
樂なき春を夢みつゝ、
若きこゝろのわなゝきて、
蝴蝶とどびぬ園の外。

戀のしらべをこゝろみつ、
園をとびしは迷ひにて、
そのしらべこそ薄傘の、

身のなりはてよ、あゝ悲し。

戀こそ愛のきはみなれ、
愛の花さく戀こそは、
世に双なき歡樂の、
この人の世の春なれど、
戀を追ひしは罪なりき。

春に春風ふけばこそ、
花さく春の歡樂は、
歡樂みつるその春の、
風こそ花の恨みなれ。

戀のしらべに生ひ出し、
花の香りの輝ける、
情の目かげくれはてゝ、
あゝ、吾が戀は紫陽花の、

色より薄く失せてけり。

この世に戀のあればこそ、
愛の花さく歡樂は、
歡樂みつる人の世の、
戀こそ人の惱みなれ。

花の香に酔ひしるゝ、
蝴蝶を戀の像なりど、
戀の快樂を夢みつゝ、
一年空にあくかれて、
戀に惱める吾が身かな。

香りは深き紅の、
薔薇の色に匂ひたる、
口唇のいる失せたるは、
空しき戀を追ひしため。

空の深きをさゝやける、
常若にてる明星の、
光の如くかゝやきし、
瞳の色のうせたるは、
空しき戀を追ひしため。

桃の天々どにほひたる、
はぢを帯びたる頬はやせて、

橄欖の香の髪みだれ、
姿もいたく瘦せたるは、
空しき戀を追ひしため。

蝴蝶の夢となづらへし、
あはれ昔の戀の上に、
今はなやめる人の子が、
戀を追ひしは罪なりき。

あゝ罪多き己か身の、
生命はかくて絶ゆべきか、
母葬りてあくがれし、
罪に塗れし己か身の、
救はるべしや神の前。

神は正義の活靈よ、
なぞ冤され己が罪、
あゝ苦しみつ苦しみつ、
立ち寄る淵の水きよく、
岩にうつれる星の影。

仰けば深き空の奥、
その幕ひらき紫の、
星現はれてケルビンの、
玉のみ聲のひびきよて、

汚れし胸に光明が。

今それひやくニコライの、
寺院の鐘はわが罪の、
淵より救ふ天籟か、
あゝ、吾れ知りぬわれしりぬ、
正義の神は聖愛よ。

あゝ、悩みたる吾が罪に、
疲れ果てたる古き身を、
闇のかなたに葬りて、
まことにわれは^{うみかへ}新生る。

こぞ吾友の贈り來し、
天の力のこもりたる、
聖の書をわなゝきつ、
胸に懷かんか、ひとよさを。

ゲッセマチなる神の子は、
罪に亡ぶる人の子は、
生命の香かぎえては、
新の靈にかへるべく。

^{とぎは}永遠に匂ふ愛をえて、
こゝろのやみの晴るゝかな、
昔は泣きし己が身に、
今はよるこび胸に満ち、
冷たる血潮湧きかへる。

海嘯の力大なるも、
人の靈を永遠の、
滅ひの谷に誘ふなる、
罪惡^{つみ}の力に及ばんや。

のとげき春とみる程に、
やがて船はふりくなり、
ソドム、ゴモラはどきのまに、
はるびて今は影もなし。

罪のくもりに道わかず、
暗より闇にうつりつつ、
覺束なくもたどりゆく、
わゝ旅人よかへりみよ。

白露のごと消えうする、
肉の快樂をたのしみて、
罪のちまたにさまよへる
ア、旅人よかへりみよ。

怨み妬みに力うせ、
空しき戀に惱みつゝ、

生命も遂にたえゝの、
ことに乙女よかへりみよ。
罪はけはしき山のごと、
惡は漲ぎる河のごと、
たどるわが道ふさぎつゝ、
滅びの谷に人の子は。

さばれエホバを愛するは、
堅きわれらの城壁なり、
萬象生命にかへるべき、
靈活の力は唯だ神に。

エデンの園をどこしへに、
流れて止まぬ生命の、
幸の清水に冷えはてし、
血をあたゝむる靈力よ。

生命の水の河のべに、
 愛の葡萄の眞樹より、
 かはきはてたる靈を、
 活かす力よその不の實、

神の光 のの、

愛の明星輝きて、

心の暗を照らさなば、

自由と幸福は人の世に。

永遠とこよの國にエンゲルが、

たはすたふるその曲は、

花の香のかぎりなく、

盡さぬ慰樂よ人の身に。

闇の野路をたどりゆく。

マ、旅人よ罪を悔い、
 無限の快樂みちたらふ、
 神の園生の小兒たれ。

罪の谷間に死の蔭は、
 神の道にぞ生命は、
 死する時も望あり、
 その道にてそ死はあらね。

溪の清水を鹿の子が、
 慕ふか如く吾が靈も、
 あゝ、吾が靈はかはき果て、
 今ひたすらに神を慕ふ。

神よ汝の恩寵いづくしあ、
 かのあたゝかき春雨の、
 雲のつばさに似たるかな。

・ 翼の蔭に人の子は。

神よ汝は歡樂の

かの湧きいづる泉よ、
水のはどりにうゑし樹の
實のらん、願ひ人の子も。

雜 報

○紀元節

神代は茫々漢々遼遠にして、年紀攷ふべからず。皇祖神武英邁の資を以て奮然中源の平定を志ま一度西海の波を蹴て、遠く大和に入り、幾多の困難艱苦を閲して荆棘を抜き、榛莽を穿ち、降るを容れ、抗するを撃ち、遂に其巢窟を殄滅し、昇る曉日の二月十二日赫々光り輝く樞原天業此に立ち、建國の礎此に成りてより、爾來皇統一系、時に浮沈あり盛衰ありたるも、未嘗て其統を替へず、連々綿々百廿二代二千五百六十一年天地と其壽を競ひて窮りなく、國体の尊且嚴な

る、實に山岳の巍然たる如く、宇内に冠絶す。今上皇帝踐祚以來三十四年、日尙淺しと雖、其威徳の隆なる天地に配し、日月と並ぶ。覆載及ぶ所、萬民昇平の澤に浴し、臨御加ふ所四海四義を献ず。其稜威八荒に伸びては即曩に征清の大捷を得て世界の舞臺に一躍して、東洋の牛耳を握り、昨又北清事あるや、列國要むるに虎狼飽くなきの心を以てす。我國其間にあり、東洋平和の擔保を以て自任し、人道に鑑み正義に依り、敢て其豺狼の欲を逞うせしめず。今や列國互に歩を譲りつ、平和の雲再南風に薫して、春霞と共に飄飄せんこと。又將に近からんとし、我國光は八紘に炳燭し、其勢龍蛇の雲雨を得て天に沖するが如し。悠久なる長日月今年も亦祝